人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	各教科等における特徴的な指導の実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

長野県須坂市

○学校名

須坂市立小山小学校

○学校のＵＲＬ

http://www.koyama-school.ed.jp/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】１学年２学級　２～６学年３学級、【特別支援学級】２学級
【合計】１９学級

○児童生徒数

【全児童数】４５７人（平成２３年１２月１６日現在）
（内訳：１年生 54 人、２年生 74 人、３年生 81 人、４年生 79 人、５年生 81 人、６年生 88 人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
　栃の木のように　深く根を張り　幹太く　枝葉ゆたかな人
【願う子どもの姿】
①心も体もたくましい子ども ②人やものを大切にする子ども ③よく考える子ども
【人権教育に関する目標】
（基本目標）
「自他を尊重し、人権問題を自らの課題として解決する意欲と実践力を育成する」（研究テーマ）
「自他のよさを認め合い、互いに尊重できる仲間づくりはどうあったらよいか。」～
　自尊感情を高め、他者理解を深めるための指導のありかた～
（重点目標）
・友だちのよさに気づき、よさを認め、自分の見返しができる子ども
・偏見をもたずに、正しい判断ができ、差別をしない子ども
・友だちと力を合わせて、人権問題を解決していこうと行動できる子ども
・お互いの立場を理解し、みんなで支え合い、たくましく生き抜く子ども

○人権教育にかかる取組の全体概要

○学校の教育活動全てを通じて実践する、系統性を重視した指導計画の効果的実践
本年度学校経営の重点
【柱１】分かる授業

・ 見とどけを大切にした授業
→各教科におけるねらいと振り返り
→人権教育の視点に立ったねらいの確認と振り返り
・個の実態に応じた個別指導を大切にする。
→「学級集団傾向を把握するためのアンケート」で学級の実態を把握し、学級集団の状態に応じた個々のつながりが深まるような有効な授業の構成、効果的な展開をする。

【柱２】特色ある教育課程

①地域を学びの場にした教育活動の創造
・学校に隣接する臥竜公園での様々な活動
「全校マラソン大会」「動物園での飼育体験」「臥竜公園の探検」「竜ヶ池の浄化活動」
・学校近くを流れる百々川での活動

② 交流を大切にした教育活動の創造
・姉妹学級による交流活動
「なかよし給食」「なかよし遊び」「特別支援学校へ通う友だちとの居住地交流」
・幼稚園との交流 ・福祉施設との交流

【柱３】楽しい学校

① 互いに認め合い支え合う、思いやりの心を育てる
② 共に活動することの喜びをもてるよう工夫する

〇児童の自主性を尊重した指導方法の工夫

① 様々な交流活動や調査活動、教科の学習等を通して、友だちと関わる機会を作る。
② 共感的に受け止める・関心をもって聞き合うなど、好ましいコミュニケーションの取り方を互いに理解することができる体験をさせる。
③ 生活実態から見えた課題を題材とした資料を使い、登場人物や友だちの考えに対して自分の経験を重ね合わせて考えさせる。
④ ロールプレイ形式の手だてを取り入れた授業を通して、差別する側とされる側の両方の気持ちをつかむことができるようにする。
⑤ 誰とでもコミュニケーションを取りやすい題材を取り上げ、友だちの頑張りを認めたり、さらに楽しくなるための考えを出し合ったりする振り返りの場を設定する。
⑥ １時間の授業の中に、友だちと協力し合うことのよさを味わえる支え合いの場を設ける。
⑦ １時間の授業の導入で、人権の視点に立っためあてをもたせ、終末部で学習カード等を使い、めあてに照らし自分の頑張ったことや友だちのよかったところを認め合う振り返りの場を設ける。

〇人権教育推進に関する点検・評価アンケートの教職員・児童生徒・保護者への実施及びその結果の活用

・「学級集団傾向を把握するためのアンケート」による児童の実態把握
・人権月間における地域の方々への授業公開

○中学校区で行う人権同和教育研究会への参加と授業研究
・いじめアンケートの実施　・人権意識の高揚を目指す人権ポスター
・人権標語づくり
○家庭・地域との連携、校種間連携
・学校及び家庭における人権教育の理解と充実を図るため、研修の内容を充実させる。
（授業参観・学年別懇談会・講演会・町別講演会・人権同和教育講座への参加）
・ＰＴＡ人権教育推進部会の活動の充実を図る。

３．特色ある実践事例の内容

◆地域を学びの場にした教育活動を通して、友とのかかわりを深めていった取組
総合的な学習の時間：「百々川日記」　　５学年の実践

（取組のねらい、目的）
○学級にいるこのような実態の子どもたちに

・周りの友だちの視線を気にしたり、恥ずかしさが先に立ったりして、考えがはっきり言えないなど自分に自信がもてない子どもたち
・友だちとのかかわりが不得手で、相手とのコミュニケーションを苦手とする子どもたち

○このようにしたら　⇩

○百々川を中心とした身近な野に継続的に通い、自然に直にふれたり、友だちと遊んだりすることを通して、野に身を置くことの心地よさを感じたり、自然の良さや大切さを感じたりする活動をする。
○野で感じた自然の不思議さや驚き、百々川への水質への疑問などから自分なりの課題を見つけ、実験や観察、身近な方々への調査活動などを通して解決していく。
○身近な野に通いその良さを感じたり、自分なりの課題を追究したりしていく中で、自分もこの地域で暮らし生きていることを感じながら、これからの自分のあり方について考える。

○こうなるだろう（めざす子どもの姿）　⇩

（人権教育におけるつけたい力）
☆自尊感情：自分の良さが見つけられる。自分に自信がもてる。
☆他者理解：相手の側に立って物事を考えたり、行動したりできる。
☆コミュニケーション能力：相手とより良い関係をつくれる。

（取組を始めたきっかけ）～題材の価値
自分の思いはもっているものの、意欲的に自分の思いを話したり、友だちの話を共感的に受け止めたりすることが苦手な子どもたちに対して、百々川での活動は、

○川遊びを通して、その場の居心地の良さや友とのかかわりの楽しさを味わえる活動である。
○百々川の「水」を切り口に、環境にかかわる問題や地域の歴史などに広がる活動である。
○災害史や水利用などの聞き取り調査などで、地域の方との出会いも生まれる活動である。

ねがい　調べたことや分かったことに対して感じたこと、思ったことなどを友だちと語り合うことを通して、自分のふるさとや自分自身、そして自分を取りまく仲間を見つめ直していってほしい。

（取組の内容）

１.『百々川日記』～野で感じたことを書いて残そう～　　単元展開

１学期（２０時間）	２学期（２５時間）	３学期（２０時間）

「百々川に行こう」【身近な自然のよさや不思議さ】（４０時間）

・河川敷で遊ぼう　・上流に行ってみよう　・枯れ草で遊ぼう
・川に入ってみよう　・川を下ったらどこに行くのかなあ
・気持ちよかったことを書いておこう　・船を作って浮かべたいなあ
・魚を探してみよう　・小さなムシなら見つかったよ　・草むらの中で遊ぼう
・秘密基地を作ってみようよ　・お気に入りのあの場所で過ごそう　・林の中を探検しよう

⇩

「調べよう　百々川のこと」【地域の歴史、環境問題】（１５時間）

・なんで魚がいないんだろう、石が赤いのはなぜ？　・調べたことを伝えよう
・百々川はどこから流れてくるのだろうか　・何のことを、だれに？
・鉱山跡が関係しているらしい　・もう魚は住めないのかなあ
・須坂の歴史も調べてみよう　・昔は百々川も氾濫したらしいよ

⇩

「百々川のこと　話そう」【自分自身と友だちの思い】（１０時間）

・水がすごく冷たかったよ　・草が伸びたから、かくれんぼができるようになった
・我慢できないくらい冷たかったね　・カマキリの卵がたくさんあってびっくり
・草刈りをしている人たちがいてあいさつしたよ　・花飾りを作って楽しかったなあ
・百々川は昔、氾濫したらしいよ　・ずっと上の方には滝があるらしい

２．研究授業を通してのコミュニケーション能力・他者理解を育てる取組

（１）単元名：「調べよう　百々川のこと」

（２）主　眼

４月より通い続けた百々川にかかわって自分なりの課題をもって調べてきた子どもたちが、調べて分かったことや実際に川に沿って下流まで歩いて百々川の姿を見てきたり、「須坂水の会」の小林さんのお話をお聞きしたりして感じたことを語り合うことを通して、自分にとっての百々川や、これからの自分のあり方を考えようとすることができる。

（３）人権同和教育の視点

・自分の思いを友だちの前で話そうとしたり、心を傾けて話を聞こうとしたりする。（コミュニケーション能力）

・　語り合いを通して共感し合ったり、新たな一面を発見し合ったりしながら、お互いの理解を深める。（他者理解）

（４）本時の展開

学習の流れ

これまでの活動を思い返す　　模造紙・写真（手だて）

⇩

※人権教育のめあてをもつ　　※支　援

今感じていること、思っていることを話し合おう　　自分の思いも入れて発表しよう

（コミュニケーション能力）

☆１時間の授業の中に、友だちと協力し合うことのよさを味わえる支え合いの場を設ける

「分かったこと」や「エピソード」など共有していることについて、友だちの思いを聞き合う。

※評　価

自分なりの思いを友だちの前で語ろうとしている（発表）

＊支援

願いを取り上げ共感していく

印象に残った友だちの話を中心にこの時間に感じたことを書く

（他者理解）

☆終末部で、ルーズリーフを使い、自分の頑張ったことや、友だちの良かったところを認め合う振り返りの場を設ける。

＊評価

印象に残った友だちの感想をルーズリーフにまとめ振り返る。

友と一緒に語り合うことで、お互いの理解を深めようとしている。（記述・発言）

（取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して行った工夫）

課題：１人１人異なった体験をどのように関連付け、お互いに共感的に受け止め関心をもって聞き合うことができるようにするか。

工夫：自分のその時の思いや、友だちの活動の様子を書きためてきた「百々川日記」や映像を見て、よりリアルに思い返すことで、エピソードを通して共有感を高めることができた。

（取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項）

実践を通して分かったこと

〇様々な交流活動や調査活動、教科の学習等を通して、友だちとかかわる機会をつくる。

〇共感的に受け止める・関心をもって聞き合うなど、好ましいコミュニケーションの取り方を互いに理解することができる体験をさせる。

〇誰とでもコミュケーションを取りやすい題材を取り上げ、友だちの頑張りを認めたり、さらに楽しくなるための考えを出し合ったりする振り返りの場を設定する。

〇１時間の授業の中に、友だちと協力し合うことの良さを味わえる支え合いの場を設ける。

〇１時間の授業の導入部で、人権教育の視点からのめあてをもたせ、終末部で学習カード等を使い、自分の頑張ったことや友だちの良かったところを認め合う振り返りの場を設ける。

４．実践事例の実績、実施による効果

〇　他教科においても、友だちの意見をよく聞こうとする態度が数多く見られるようになった。

〇　全体の前では、自分の考えをなかなか発表しようとしなかった児童が、受容的な雰囲気の中で、

発言する姿が見られるようになった。
○　これからも、クラスみんなで共通の体験活動に取り組もうとする意欲が感じられるようになった。

５．実践事例についての評価

（取組についての評価、及びそう評価する理由）

自尊感情や他者理解を高め、コミュニケーション能力を高めていくために大切にしていることは、児童生徒を丸ごと理解し一人一人がつながる集団づくりを目指すことである。子どもたちが様々なことを感じお互いを認め合い受容し、それを繰り返すことで子どもたちがつながっていき、そのつながりから温かい心をつくっていくことができると考えている。一人一人の考えをつなげていき、それを自分たちの学びに生かしていく、まさに、本時はそういった授業であった。５年生の学習で大事にしていたことは、他者理解やコミュニケーション能力を高めたいということであった。そのためには次の３つが大事であると考える。

１つ目は、子どもたちの共通の思いが必要であるということ。その思いから子どもたちは、自己を語れるようになり、友だちの発言を聞くことができるようになる。今、百々川は、子どもたちの生活の一部になっている。そこまで浸り込んでいる子どもたちだからこそ、それぞれに思いがもてるようになる。

２つ目は、子どもたちの実態把握である。学習の足跡を教師がしっかり理解して学びの足跡から子どもの思いをつなげていくことが必要である。

３つ目は、振り返りの場面で焦点を当てた子どもの学びの姿で、もう一度自分たちの学びを考え直すことである。

以上の３点で、本時の授業はつくられていた。人権教育は思いやりの心を育てたり優しさを身につけたりする学びも大切であるが、本時のようにお互いがつながりあえる学習場面をいかにつくっていくか、そして、それを子どもたちが実感できる場面をいかにつくっていくか、ということも大切である。

振り返りの場面での、Ｂ君の感想「魚が住めても住めなくても関係ない。百々川で自分たちは十分に楽しんだ」の取り上げ方が素晴らしかった。いろいろな子どもたちの思いを十分に語らせた上で、子どもたちが自分の思いをもう一度振り返る一つのきっかけとして、Ｂ君の感想を最後に持ってきた。この感想は、百々川を見つめ直す大きなきっかけとなったと考える。

（保護者や地域住民からの反応）

百々川について調べていく中で「須坂水の会」の小林さんと出会うことができた。たくさん生まれてきた疑問を質問する機会を得たのだが、写真や硫黄鉱石などの本物を見せてくださりながら真剣に答えてくださる小林さんの姿から、「地域の先達との出会い」を確かに感じることができたように思う。さらに後日、詳しいデータをつけ加えた回答を送ってくださったのだが、自分たちのこれまでの活動に自信を持つことができたり、自分たちからはたらきかけることで応えてもらえるという手応えを感じたりすることができた。

（現在の課題）

受容的な雰囲気の中、自分の考えや思いを語ることができる授業を通して、お互いに認め合い自分も友だちも大切に思える子どもを育てたい、という願いに変わりはない。今回の実践を通して、継続的な取組の必要性を改めて感じた。日々の学校生活の中で、どれだけクラスの仲間と共にあることのよさを感じさせることができるかという課題のもと、日々の授業づくりに取り組んでいきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

須坂市立小山小学校
地域を学びの場にした教育活動により,自尊感情を高め,他者理解を進めるとともに,コミュニケーション能力を身に付けようとした事例である。 総合的な学習の時間を使い,学校近くの「百々川」に出かけ,友達と一緒になって自然を肌で感じ,地域の歴史や環境について調べ,その結果をクラスで話し合うという活動であるが,体験を通してお互いを理解できるようになった様子がうかがえる。 また,百々川のことを調べる過程で,「地域の先達」との出会いと触れ合いがあり,学習の幅が広がる,という結果にもつながっている。 その意味から,教室とは異なる自然の中での実体験を生かし,コミュニケーション能力等を高めようという試みは,一定の効果があったと思われる。 本事例は,学校が置かれた環境や条件を人権教育の手法として生かしていることから,他の地域・学校でも参考にし,応用できる事例であると考える。